

港湾の中長期政策 PORT2030

港湾労働者の存在が どこにも見えない!



11月13日、都内よみうりホールにて港湾の中長期政策 PORT2030 シンポジウムが開催され、真島中央執行委員長と松永書記長とで参加してきた。PORT2030についてはこれまでも話題に挙げてきたが、7月に取りまとめができたとして「2030年の『みなと』の姿を一緒に考えてみませんか?」と題して、シンポジウムが開催された。

この政策策定にあたっては2016年4月以降、交通政策審議会港湾分科会での8回にわたる審議と有識者懇談会における4回の議論を行ない、その成果を取りまとめたのだとあった。しかし、そのいずれの場においても労働者の姿は見えていない。今回の参加はそういった意味で、審議委員や有識者が、どのような視点に立って政策を策定したのかを知る良い機会と思い参加した。

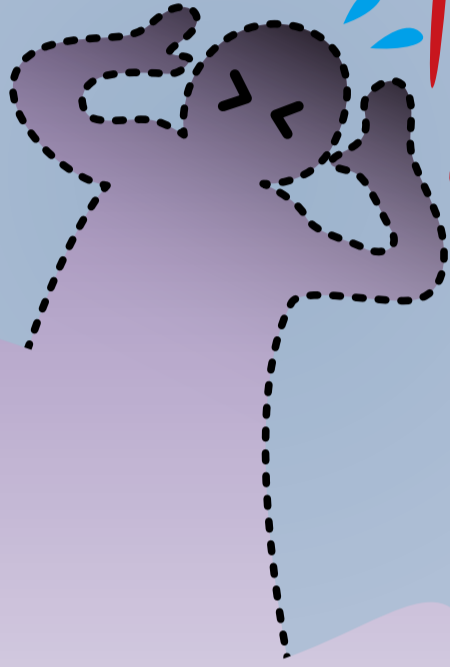
シンポジウムは国交省港湾局主催、公益社団法人土木学会共催、公益社団法人日本港湾協会協力のもと開催され、400名程度の参加者があった。基調講演には女優や学者による講演があり、特に小林京都大学教授からは「激動する国際情勢と港湾の将来像」と銘打った講演がもたれたが、夢物語的な考えが垣間見え、そこには既存の港、労働者のことは全く触れられずに政策が作られたことを感じた講演だった。

続いて「港湾が開く未来」として、5人のパネラーによりディスカッションが、家田政策研究大学院大学教授を座長として進められた。パネラーには港湾運輸を利用する立場として、ONEの木戸社長や港を使う立場での四国開発フェリーの瀬野副社長、同じくプリンセスクルーズの市川ディレクター、港湾が街を作るといふ考えの橋川東京理科大学教授、ITを得意分野とする神成慶應技術大学教授で、それぞれの立場で意見を交わっていた。

木戸社長からは「大型船を受け入れる整備よりも中型船に特化した港湾整備を考えるべきだ」や「東南アジアの国から日本にトランシップ貨物を」などの発言があった。瀬野副社長からは「地方港は変わっていくべき」として、韓国の釜山港を引き合いに「日本も港を絞っていくべき」など、既存の港を全く考えない見解が出された。

ただし、注目したいのは、神成慶應技術大学教授の発言で「IT化を進めるにあたっては、熟練労働者の技術の継承や労働力の軽減などを進める必要があると考えている」との発言があり、詳しい話は聞けなかったが、大変興味ある発言だと思った。

以上のように、労働者を無視した政策がまとめられ、また進められていくが、我々にとってどういった影響を及ぼすのか、どこかの港で進められるかなど、今後も注視する必要があると感じたシンポジウムだった。(松永英樹)



第55回護憲大会に参加して

第55回護憲大会に参加して「憲法ではなく政治を変えよう、憲法理念の実現をめざす」という大会の総テーマの下で、メイン企画「日本国憲法でつくる明日・改憲は許さない」や「非核・平和・安全保障」をテーマとした分科会、基地問題交流会に参加して様々なことを学べた3日間となりました。

安倍政権の下で強硬に行われた特定秘密保護法や集団的自衛権の行使容認、戦争法や共謀罪、働き方改革などに止まらず、9条の改憲と合わせて緊急事態条項の必要性を主張し、戦争ができる国へと更に押し進めるばかりか反対する市民への弾圧が行われる可能性は否めません。また、9条改憲に反対する世論や自衛隊違憲論がある中である程度の歯止めがかかっていたのではないかと考えますが、9条改憲を許して集団的自

衛権を行使するような自衛隊を正当化してしまう動きにも反対し続けなければなりません。また、「基地はいらない」という沖縄県民の意思に反し、工事が再開された辺野古新基地建設や今後行われるであろう国会への自民党の改憲案提出による改憲発議などの数多くの問題に対して組織的且つ継続的に反対し続けるためにも、各職場や各地域での労働組合の存在や活動が極めて重要になることは言うまでもありません。

最終日の大会アピールの中で触れられた「今を生きる私たちが未来のために果たすべき責任」という言葉と今大会で見聞きして学んだことを今後の組合活動にどのように繋げ、活かしていくかということを考えさせられる大会でもありました。

(九州地方関門支部井友沿岸分会 河野 剛)



LOCAL
九州



長崎おくんち今年が目玉は「コッコデシヨ」 7年に一度の

長崎おくんちは、長崎県長崎市の諏訪神社の祭礼。10月7日から10月9日までの3日間で開催されます。国の重要無形民俗文化財に指定されています（昭和54年指定、指定名称は「長崎おくんちの奉納踊」）。

寛永11年（1634年）2人の遊女が諏訪神社神前に謡曲を奉納したことが長崎おくんちの始まりとされています。以来、長崎奉行の援助もあって、年々盛んになってきました。更に、奉納踊りには中国・ポルトガル・オランダ等異国の文化と融合した、異国情緒溢れるお祭りとして存続しています。

長崎おくんちは、諏訪神社の氏子にあたる長崎市内の各町が、演し物と呼ばれる様々な演目（奉納踊り）を奉納するものです。長崎市内にある59の町（以前は77町）が5から7町ごとに7組に分かれて年ごとに奉納します。その年の当番に当たった町を踊り町と呼びます。

長崎おくんちの中でも最も人気の高い奉納踊りが、長崎市樺島町の「太鼓山」：通称コッコデシヨです。今年はこの樺島町が踊り町でした。コッコデシヨは、江戸時代、長崎の貿易で現大阪府の堺地方のだんじりが伝えられたと言われています。4名の太鼓打ちが座り、屋根に大きな座布団を5枚積み重ねた太鼓山を36名の若者が担ぎ、力強い太鼓の音と掛け声で廻したり、放り投げたりする勇壮な出し物です。

「ホーエンヤホーランエーエーヨイヤサノサ」の掛け声で左右に揺らしながら入場します。「アトニセイ」で後ろに戻り、「トバセ」で走り、「イヤシャントサイタヨナ、ヨヤシヨ」で3回上下して高く放り上げ、手を叩いて片手で受け止める。この時の掛け声が「コッコデシヨ」の由来となっています。

他にも、和・洋・中様々な奉納踊りが奉納されます。組合員も地方祭休を利用して、祭り自体に参加したり、見物に行ったりします。（長崎県支部長崎倉庫分会 福江浩二）

注）呼称について「長崎おくんち」「長崎くんち」の両方の言い方がありますが、「長崎おくんち」で統一しました。

